Yamaguchi University

山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第23号（2007. 3）

家族関係及び家庭の機能に関する大学の授業実践（1）

―― 小学校家庭科について ――

入江　和夫

Practice in a Course of University about Family Relations and Family Functions (1)
―― About Elementary School Home Economics ――

IRIE Kazuo
(Received January 12, 2007)

キーワード：小学校家庭科、家族関係、家庭の機能

はじめに

「教科教育法家庭」は小学校教員免許取得のための授業であり、受講生はこれによって小学校で家庭科を教えることができるようになる。しかし、日本家庭科教育学会の全国調査[1)]によれば、家庭科に関する興味関心及び意欲は小学生から高校生の女子の方が高く、男子は低い。小学校教師として家庭科の目的、男女で学ぶ意義などの理解に男女差があってはならない。

学習指導要領は約10年ごとに改訂され、家庭科の内容は時代に対応しながら変化してきた。しかし、「家庭生活をよりよくする」の目標は戦後、一貫して変わらず、平成元年度学習指導要領改訂の家庭科においても同じ目標があった。文部省教科調査官である橋本[2)]は平成元年改訂までの家庭科について「制作や調理をすることに終わりがちで、家庭生活をよりよくしようとする目標が実現したとはいえない現状があった」と述べている。すなわち、家庭科とは家庭生活に結びつけられないまま、生活手段である調理や被服製作を中心に授業が進められてきた。

この反省に立って、今回の学習指導要領[3)]は「食物」「被服」などの領域でくくる構成をやめ、各内容の関連をはかりやすいように構成されている。さらに内容の中身そのものに大きな改訂を行った。その土台は中教審第１次答申[4)]「心の教育」である。その結果、内容（１）に「家庭生活に関心をもって、家庭の仕事や家族との触れあいができるようにする」が盛り込まれた。これは戦後はじめての学習指導要領[5)]（昭和22年）の内容ときわめて近い。そこには、家庭科とは単に技能教科でなく、男女が協力して家庭生活を営むための教科であることが明記されている。もし、現大学生が家庭科を調理や被服だけ行う技能教科としてイメージし、そのまま、教師として授業を行うとしたら、それは今回の改訂で強調されている「家庭生活」の意義を子どもたちに理解させることはできない。

そこで、今回、大学生の小・中学校家庭科に対するイメージは何か、また教師として何を重点的に教えたいのかの調査を行い、その結果に対して学生はどう考えるのかを明らか

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

にすることにした。次に、S22年の「はじめのことば」、中教審第１次答申「心の教育」を教材として、家庭科とは何か、今、求められている家庭の機能とは何かを理解させる授業を行い、学生の反応を考察することを通して、これからの家庭科教師の在り方を一考した。

方法

1）Web 書き込み：ファイルメーカー ProVer6 unlimited
2）統計ソフト：SPSS ver13

結果と考察

1　小中学校家庭科観調査

教師とは自分が受けてきた授業のイメージが下地になって授業を組み立てるものである。大学の「教科教育法家庭」は小学校教諭免許取得に必須の授業であり、大学生が小学校教師になれば家庭科の授業を担当する。そこで学生が持つ家庭科とはどのようなイメージであるのかを調べることにした。

（1）内容

家庭科とは戦後、新しく誕生した教科である。家庭科を衣食住のみの教科と考えるなら、それは戦前の家事裁縫科であり、女子のみ教科である。学生は家庭科をどのようなイメージとしてとらえているのか第１回目の授業で「小学校・中学校の家庭科とはどのようなイメージか」「小学校の家庭科を受け持った場合、どの領域に力を入れて学習させたいか」について調査（結果をその場で学生に知らせた）を行い、その結果を図１に示した。

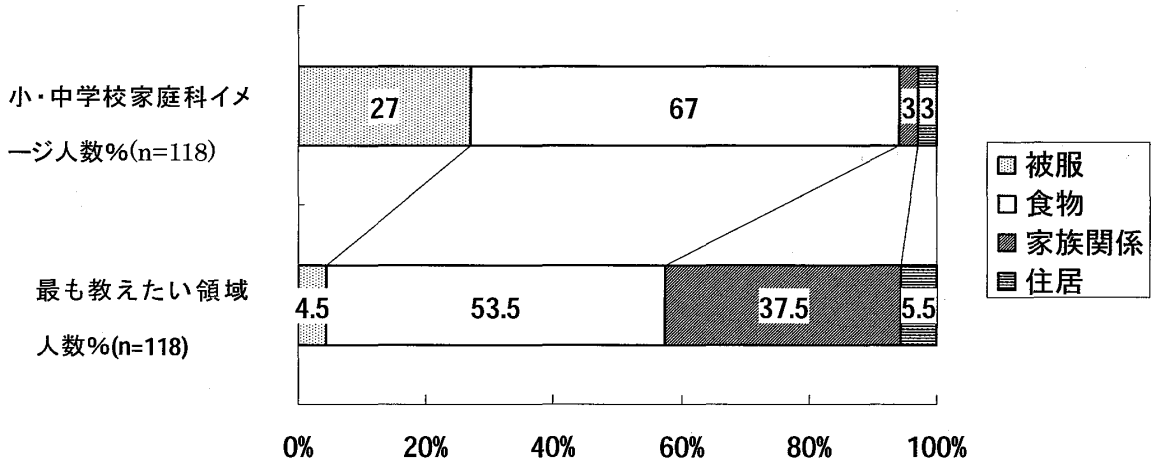

図１　小・中学校家庭科のイメージと自分が最も教えたい領域

上図が小・中学校の家庭科イメージである。学生の67%は家庭科とは「食物」であると回答し、27%が「被服」、３%が「住居」、３%が「家族関係」であった。すなわち、学生の97%は小中学校家庭科を衣・食・住領域のイメージとしてとらえていた。戦後、誕生した時点から家庭科の目標は「よりよい家庭生活」を目指すことになっている。しかし、大学生は小中学校家庭科を単に技能教科としかイメージできていない。橋本はこのことを指摘していたが、それを裏付ける結果となった。

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

「自分が教師となった時、家庭科の中で最も教えたいこと」の結果は図１下である。「食物」領域53.5%で最も多く、次いで「家族関係」37.5%であった。特に「家族関係」は大幅に増加した。おそらく、日々、報道されることが多い虐待や家庭内暴力など“家庭”に関わる問題を「家族関係」に結びつけて考えたからであろう。小中学校家庭科を技能教科とイメージした学生であっても自分が教える際には「家族関係」に力を入れようと考える学生が増加したことは今回の学習指導要領の趣旨から考えれば、好ましい結果である。

（２）学生の反応

大学生は小学校家庭科で「家族関係」を教えることができるだろうか。教える下地として家庭科で「家族関係」を習った記憶があれば、それを手がかりにすることができる。図１上は家庭科のイメージ調査であるが、果たして彼らは小中学校家庭科として「被服」「食物」「住居」「家族関係」について強いイメージを選択したのであろうか、それとも「家族関係」の記憶がなかったのだろうか。それを把握するために学生の自由記述を分析することにした。

以下に学生の自由記述例の一部を示した。

自由記述例

1a：家庭科の授業といえば調理実習や裁縫をするというイメージが強く、「住居」や「家族関係」などの分野の授業は私の中ではあまり記憶がありませんでした。

1b：回収された質問用紙にはきっぱりと小中学校の家庭科のイメージは食物である、にしました。家族関係のことに関して授業で聞いたかどうか記憶にありませんでした

1c：小・中学校ではエプロンやナップサックを作った記憶しかなく、家族関係について今まで学んで いなかったことに気がついた。

1d：授業で一番印象に残っている事と言えば、家庭科イメージ調査の結果についてであえる。私が今までの家庭科について振り返るとき、雑巾やエプロンを作るといった裁縫のことが一番大きいもののように感じた。逆に家族関係についてと先生がおっしゃった後でも、これといって思い出すものがなかった。

1f：家族関係などは道徳の授業くらいでしか扱わないと思っていたが、家庭科でも扱うとは知らなかった。

1g：私はアンケートの中の「家庭科でイメージするもの」というので「家族関係」というものを選びました。なぜなら、私の習ってきた先生はほとんどの先生が「家族」というものに重点をおいて授業をしていたからです。だから自分にも家族関係というのが強く印象に残っているのだと思います。

1h：家庭科の授業において、これらの知識や技術を生徒に教えることに重きがおかれてしまっていることが問題なのだと思いました。もちろん、食事の作り方、ボタンのつけ方、エプロンの縫い方などを教えることも必要ですが、それらの知識や技術を、一方的に教えるだけでなく、家族との関わり合いを考えながら、いつどのような場面で家族のために利用できるかを、子ども達自身に考えさせる時間を組み入れていくべきだと感じました

上記の学生1a は“調理実習や裁縫をするというイメージが強く「家族関係」はあまり記憶にない”としている。1b は“小中学校の家庭科のイメージはきっぱりと食物”であり、“家族関係のことに記憶にありませんでした”と言っている。1c は“小・中学校ではエプロンやナップサックを作った記憶しかなく”のように被服にイメージがあったが、

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

“家族関係について今まで学んでいなかったことに気がついた。”と述べているように、「家族関係」がなかったと思うぐらい、小中学校家庭科では関連づけて学習されてこなかった。1d では“今までの家庭科について振り返るとき、雑巾やエプロンを作るといった裁縫のことが一番大きい”と被服をイメージし、入江が「家族関係」が小学校家庭科にあると説明した後でも「家族関係」を“思い出すものがなかった。”と述べるように、この存在がなかった。1f は「家族関係」は家庭科でするものでなく、道徳で行うのではないかと考えるぐらい家庭科と「家族関係」が意識として結びついていなかった。

以上のように学生の家庭科領域の選択肢として「家族関係」は欠落していた。換言すれば、彼らが受けてきた小中学校の家庭科とは「家族関係」が家庭科の領域として“ない”ような授業であったことを伺い知ることができる。

1g は家庭科のイメージとして家族関係をあげた学生である。“私の習ってきた先生はほとんどの先生が「家族」というものに重点をおいて授業をしていた”と述べている。それは生活技能の習得と家族を結びつけた授業だと考えられる。このような授業は生活技能を学習しているときであっても家族を考える時間が与えられ、「家族関係」を児童・生徒に感じさせているのではないだろうか。1h では、食事の作り方、ボタンのつけ方、エプロンづくりなどの技能を“家族のために利用できるかの観点から教えることが大切だ”“子ども達自身に考えさせる時間を組み入れるべき”と述べ、今回の学習指導要領改訂の内容に沿った具体的な方策を示している。確かに生活技能を家族のためにという視点は子どもの側から考えれば、技能習得を通して家族を考えていくことになる。これは家庭科の授業をすすめるにあたり最も大切なことである。

2　教材「昭和22年学習指導要領家庭科」

（1）内容

学生は男女共修として小学校家庭科を学習してきた。しかし大半の学生は家庭科を技能教科と考えている。そうであれば今回の学習指導要領で求めている家庭科観とは合致しないばかりか、男女が共に学ぶ意義さえも感じないのではないだろうか。学生を1g や1h のような家庭科観に変更させる教材が必要である。家庭科は単に技能教科ではなく、よりよい家庭生活を目指す、男女が共に学ぶ教科であることを理解させたい。それには最新の学習指導要領より、最も古い学習指導要領の方が強いインパクトがあると思われる。というのはこれらはすでに60年前に文部省から出ていたからである。そこで小学校から高校までの家庭科に関わる昭和22年学習指導要領の「はじめのことば」を抜粋し、教材とした。以下に教材としての観点を述べる。

―――――――――――――――――――― 教　　材 ――――――――――――――――――――

「はじめのことば

家庭科すなわち家庭建設の教育は，各人が家庭の有能な一員となり，自分の能力にしたがって，家庭に，社会に貢献できるようにする全教育の一分野である。この教育は家庭内の仕事や，家族関係に中心を置き，各人が家庭建設に責任をとることがてきるようにするのである。・・・・家庭科の教科目の中に家族関係の研究は必要欠くべからざる課程とすべきで第五，六学年に始まる家庭科の中にも，必須のものとすべきである。裁縫という科目で，今まで女子にのみ与えられていた科目に代わったこの新しい第五，六学年の家庭科を，今までの古い考え方で考えないように，その目的も内容も，考え方も，今までとは全く違ったものであり，すべて家庭生活を営むことの重要さを基礎

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

にしていることを，よく注意すべきである。」

このように新しく誕生した家庭科とは家庭建設のための教育であると記載されている。その目的は家庭や社会に貢献できることとし、学習内容は「家庭内の仕事」「家族関係」を中心に置くとある。また、注意すべき点として、家庭科の学習とは女子のみに与えられた「裁縫」という科目と違って、「家庭生活を営む」ことに収束していかなければならないことである。換言すれば、「家庭科＝家庭建設の教育」であることから、女子だけでは家庭建設にはなりえず、男子も学ぶ必要性が生まれる。また、ここには家庭科とは単に家事技能教育ではなく、家族関係は小学校５，６年家庭科に必須とすべきということが記載されている。このような説明をした後に、現学習指導要領に通じる家庭科観を学生に説明した。

（２）学生の反応

「はじめのことば」説明後における学生の自由記述例を以下に示し、考察していく。

自由記述例

2a：今日の授業で学んだ「はじめのことば」から、この教育は家庭内の仕事や、家族関係に中心を置き、各人が家族建設に責任をとることができるようにするのである。と書いてあって、家庭科というのは家庭建設を中心に学ぶものだったんだなということを知りました。

2b：今回の授業ではじめて家庭科の学習指導要領を読んだ。まず驚いたのは、昭和22年当時から、家庭科は女の子だけがやればいいというものではない、としっかり規定されているということだった。次に驚いたのは、家庭科の授業が、単に食物、裁縫などを教えればよい、というものではなく、家族関係について中心が据え置かれている、ということが規定されている、ということだった。小中高の12年間、家庭科を学んできたがこのようなことを聞いたのは初めてであった。家庭科の授業はわりかし好きなほうであったが、それは、裁縫や調理実習があったからで、昔からそれらの技術を向上させればよいのだ、と考えていたため、カルチャーショックだった。

2c：「はじめのことば」を読んでみて、家庭科は女の子だけがうけるものではなく、性別に関係なく家庭の仕事や家庭建設に責任をとることができるようにすることを目標にしていることがわかり、この発想は戦前では考えられないことだと思われるので、家庭科は戦後の教科いうことに納得がいきました。家族関係に中心を置いた教科だと書いてあったので、やはり女の子だけでなく、男の子も学ばなければならない教科だと思いました。

2d：「家庭科の授業は、女の子がやるものだ。」という考え方はやはりおかしい。はじめのことばの中にあるように、男も女も家庭建設に責任がもてるようにならなければならない。

2e：今までの家庭科の授業は「裁縫」というイメージがあり、女の子だけが勉強すればいいじゃないか、と思っていたがそれは間違っていることに気付かされた。家庭科は家庭建設の教育なのだ。つまり女の子だけでなく男の子も、家庭を持つ全ての人が学ぶべき教科が家庭科なのだ。

2a は“家庭科というのは家庭建設を中心に学ぶものだったんだなということを知りました。”というように家庭科の目的が家庭建設にあることをこの資料から理解した。2b は“まず驚いたのは、昭和22年当時から、家庭科は女の子だけがやればいいというものではない、としっかり規定されているということ、次に驚いたのは、家庭科の授業が、単に食物、裁縫などを教えればよい、というものではなく、家族関係について中心が据え置かれている、ということが規定されている、ということだった。”とあるように、自分が学ん

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

できた家庭科からは感じられない男女共に学ぶことや家族関係中心の家庭科に驚愕している。

2c,2d,2e は「家庭建設」の教育だからこそ、男女が学ぶ必要があることを言及している。2d の“男も女も家庭建設に責任がもてるようにならなければならない”や2f の“家庭を持つ全ての人が学ぶべき教科が家庭科なのだ”は2a,2b の考えを深化させたものである。

以上のことから「家庭科とは調理、被服を行う教科」ととらえていれば、男子はそれほど家庭科を重要に考えない。しかし、家庭を建設する教科として家庭科を認識すれば、男子は重要と考えるようである。これは衣食住の技能とはやはり、女性が行うものであり、それとは別物の家族関係では父として果たす役割があるという意識が垣間見える。果たして衣食住と家族関係は別物なのであろうか。小学校学習指導要領の目標「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して家庭生活への関心を高める・・・」がある。ここでは例えば調理実習を単に技能習得として学校のみで終わらせていたのでは、家庭生活への関心は高まらない。この技能を活用して家庭で暮らす“父母、祖父母のために料理をつくろう”とリンクさせることで父母、祖父母の姿が家族の中で見えるのであり、心を感じる料理となり、家庭生活への関心が高めまるのではないだろうか。衣食住の技能によって“心が通う”家庭生活となれば、今回の改訂の趣旨に沿うことになる。このような意識の変革を次で述べる家族の機能を理解させた後で行う予定である。

3　教材「1998年中教審答申：もう一度家庭を見直そう」

（1）内容

2から家庭科と家族関係との関連を意識づけた。しかし、客観的に家族が果たす役割、すなわち家族の機能ということを学生は考えたことはないのではないだろうか。今回の学習指導要領で「家族の人間関係」や「家庭の機能充実」の観点から改訂されているが、その土台となっているのは中教審第１次答申「心の教育」である。この中に「もう一度家庭を見直そう」が出されている。ここでは、これを教材とした。以下に教材の観点を述べていく。

―――――――――――――――――――― 教　　材 ――――――――――――――――――――

「★　家庭の精神的機能ー「コンテナー家族」から「ネットワーク家族」へ

家庭の持つ機能は生活保持機能と精神的機能の二つに大別されるというが、今日では社会全体として、生活水準の向上等を背景に、生活保持機能よりも、家族同士が愛情を通わせ、心の安らぎを得る精神的機能がより期待されるようになっている。調査によれば、多くの人々が家庭の役割として、「休息、安らぎを得る場」、「互いに助け合い、支え合う場」、「家族がお互いに成長していく場」といった主に精神的機能にかかわる事柄を挙げている（資料２－２）。また、子どもを持つ親に対して、子どもがいるということについての考え方を聞くと、多くの者が「家庭が明るく楽しい」、「生活のはりであり生きがい」を挙げる一方で、「家のあとつぎ」、「老後のささえ」との回答は極めて少なく、子どもの存在に精神的な価値・情緒的な価値をより強く見いだすようになっている（資料２－３）。

しかしながら、現実には、家庭の精神的な機能はむしろ低下してきている感がある。その状況を、「コンテナー家族」から「ホテル家族」への変容としてとらえる見方がある。すなわち、「容物（コンテナー）」としての家庭の中で、一緒に暮らし、温かい情緒の交流を行うような家族から、同じ家で起居しながら、生活時間はまちまちで互いに何をしているかすら知らないホテルの宿泊者のよ

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

うな関係の家族へと変化してきていると言われる。

日本人は、自分の属する「場」を大切にし、「契約」よりも「縁」を重んじてきたという。そうした価値観が、増加しつつあるものの国際的に見てまだ低い離婚率などにも現れているように、アメリカなどで深刻な問題となっている「家庭崩壊」のような現象を一般化させず、社会の安定の基礎になってきたとも言う。しかし、家族のつながりを「契約」のように意識化せずに、「縁」としてとらえる家族観は、ともすれば「家庭という場の中にいるだけで自然に情が通い合い、子どもも自然に育っていく」という思いこみを我々に生じさせてこなかったであろうか。そして、現実に進行している「ホテル家族」化とも言うべき家庭の空洞化を直視しようとしない雰囲気をつくってしまったのではないだろうか。

これからの社会では、社会の基本的な単位として個人の重さがますます増していくであろう。我々は、思いこみの上に安閑とすることなく、家族一人一人が一個の人格として存在することを認識し、互いに意識的にコミュニケーションを図り、心を伝え合う家族（「ネットワーク家族」）の在り方を模索していくべきときを迎えているのではないだろうか。相互に思いやりのある明るい円満な家庭をつくるというこれまで自明とされてきたことを、家族同士の意識的なネットワークづくりを通して努力して実現するということが今日的で切実な課題となっている。」

ここで家庭がもつ機能とは生活保持機能と精神的機能の２つである。前者は衣食住に相当する機能であり、後者は心の安らぎを得る機能である。今日の日本の家庭では後者の精神的機能の方が期待されている。その理由として「ホテル家族」化しているからである。ホテル家族とは家庭の中で、同じ家で起居しながら、 生活時間はまちまちで互いに何をしているかすら知らないホテルの宿泊者のような関係の家族である。この解決策として提示されているのが家族相互の意識的なコミュニケーションである。以上のことを学生に把握させるために、この資料を読み、解説しながら授業を進めた。

（２）学生の反応

この教材に関する学生の自由記述例を以下に示し、考察していく。

自由記述例

3a：「家族」について今日の授業で改めて考えさせられたように思います。家族という集団は他のどの集団よりも身近な集団であり、その集団が存在することはごく自然なことで、それに加わっていることは当たり前のことと思っていました。そのため家族について深く考えたこともなくいました。今回の授業で家族の果たす機能、あり方について考え聞いて、実際に自分の家族にもそのような機能などがあったのか考えるようになりました。

3b：今回の授業で自分の家族について考えてみた。するとどちらかといえばホテル家族だと思った。そして互いに意識的にコミュニケーションを図ろうとはしていない。自分の家庭について考え直さないといけないと感じた。

3c：いざこざがあっても、その後は一緒に笑い合える、私の家族はそんな家庭を作り上げて今に至っています。「精神的機能」の不足から、いざこざが起こった後、二度と笑い合えないようなことが起こってしまう、それがニュースにでてしまう家族なのではないでしょうか。いいことも悪いことも何でも言い合う、ぶつけ合う、これは現在の家庭状況の中では難しいことのようであり、また、一番必要なことです。

3d：「ホテル家族」が増え、家庭が空洞化していることはとても寂しくて悲しいことだから、それぞれの家族同士が思いやりを持ち、明るく温かい家庭をつくって行くことが必要不可欠だと思った。

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

そして、今回の授業を終えて、家庭科の中で家庭内や家族関係に重点が置かれていることに、すごく納得できた。
3f：今回の授業で「ホテル家族」という言葉を聞いて、実家のことを思い出した。僕がまだ幼いころは必ず家族そろって晩御飯を食べていた。しかし、時が経つにつれて、家族みんなで晩御飯を食べることもなくなった。そのうち家族との会話がなくなっていった。晩御飯は家族が一番会話を交わすところで、家族の団欒ということを考えたときに一番大切な時間だと思う。
3g：世の中にはそんな平和な家庭ばかりでないことも知っている。だからこそこれから家庭の役割についてもいろいろと学び、子供たちのみではなくその親にも伝えれたらと思う。
3h：確かに家族それぞれ仕事や学校や習い事などでみんなが集まることがなかなか難しくても、互いにコミュニケーションをとる意思があればこんなことにはならないと思う。家族に対してもっと関心がいくように、家庭科の授業で自分の「家族」を振り返られる機会をたくさん持つような授業を行っていくことが大切だなと思いました。
3i：家族間のコミュニケーションはなくてはならないものです。けれど、ホテル家族化してしまう中でも家族がコミュニケーションをとる方法はあると思いました。土日や平日に家族で会話する時間を増やすことや、家族が会える時間にはゆっくりとお互いの話を聞き、理解することはできると思います。実際に、私の家族は共働きですが、両親とは本当に分かり合えているし、子どもの頃からとてもよく話をしたり、悩みを相談したりして尊敬できる家族です。時代の変化の中で、時代に合わせた中でどのようにして家族のコミュニケーションを図るかを各家族で考えることが必要なことではないだろうかと思いました。
3j：家族の空洞化を防ぐためには互いに意識的なコミュニケーションを行うことが大事だと学び、毎回の授業で行うコミュニケーションはそのためにも必要なのだと改めてその重要性を理解した気がします。

3a3b は家庭の機能の学習後、自分の家庭について振り返った内容である。前者は家庭の機能として生活保持機能、精神的機能があることを初めて知ったと述べている。このことは小学校・中学校家庭科で、いかに“家庭”という存在を抜きにして学習させていたかがわかる。小学校の授業の中でも家庭の機能をとりあげ、理解させることを通して、「家族」とは何かを客観的に理解させることが重要である。後者は家庭の機能と「ホテル家族化」を自分の家族にあてはめて考えた事例であり、積極的なコミュニケーションが必要だと述べている。3c は“いいことも悪いことも何でも言い合う、ぶつけ合う、これは現在の家庭状況の中では難しいことのようであり、また、一番必要なことです。”と述べているように、精神的機能にタフさを求めている。このように家族とは生じた種々の問題を自分のものとしてとらえ、解決に向けて励ましあいながらお互いに努力していくことが大切である。3d は「ホテル家族」の問題を理解したことから、現状の家庭科が家庭内や家族関係に重点が置かれていることを理解したと述べている。このことから、この資料は学習指導要領改訂の意図を理解させる良好な教材である。また、小学校で活用すれば、児童は家庭科で家族関係の重要性に気がつくのではないだろうか。3f は家族のコミュニケーションの機会の場として晩ご飯を考えた。家庭科の授業では児童に同じことを考えさせることも必要である。3g は家庭の役割を、親にも伝える必要性を指摘している。確かに子どもが授業成果を家庭に持ち帰ったとき、親の協力は非常に重要である。3h は「家庭科の授業で自分の「家族」を振り返られる機会をたくさん持つような授業を」すれば、関心が高

NII-Electronic Library Service

Yamaguchi University

まると述べている。このような学習が今回の学習指導要領の趣旨を具体的に反映したものになる。3i は具体的に可能なコミュニケーションの日時を土日と考えている。教科書も同じように設定されていることから、このあたりが実践可能な日かと考えられる。

まとめ

家族を意識させる大学授業「家庭科」における学生の反応から以下のようなことが集約される。

1）家庭科を「衣・食・住」とイメージする学生は97％で圧倒的に多く、「家族関係」とした学生は３％であった。
2）家庭科の中で力を入れたい領域とは「食物」領域53.5％、一方「家族関係」は37.5％となって増加した。それは報道されるニュースが家族に関わる内容が多いためと考えられる。
3）教材「昭和22年学習指導要領家庭科」の授業では、家庭科が戦後新しくできた教科、家庭建設の教育、男女の教科、小学校からはじまる家庭科の内容に家族関係の研究は必須、などを学生の多くは今まで受けてきた家庭科からは想像できないものだったと述べている。
4）教材「1998年中教審答申：もう一度家庭を見直そう」では、家庭の機能について学習させた。学生は家庭にこのような機能があることを改めて認識した。このことは今まで学習してきた家庭科に“家庭”を振り返るものがなかったことを意味している。

おわりに

家庭科を将来担当できる教師の育成をこの授業で行わなければならない。家庭科は今回の学習指導要領で「家族関係」を重視し、「食物」「被服」「住居」領域も家族にリンクさせている。すなわち、家庭科で調理実習、エプロンづくりなどを単発的に行うことにはなっていない。家庭教育力が乏しくなったと言われる現在、その重要性とパワーアップに向けた具体的な方法と実践が求められている。それはこれから家庭科を担当する教師が衣食住の知識・技能を「家庭生活」にリンクする視点をもって授業を行なうことでなされると考えられる。

参考文献

1）日本家庭科教育学会：「児童・生徒の家庭生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築」―家庭生活についての全国調査―　(2002)
2）橋本　都：「新小学校教育課程講座＜家庭＞」 p29　ぎょうせい (1999)
3）文部省：「小学校学習指導要領」(1998)
4）中央教育審議会：「幼児期からの心の教育の在り方について」答申第２章もう一度家族を見直そう http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/980601.htm#2
5）文部省：「過去の学習指導要領」http://www.nicer.go.jp/guideline/old/

NII-Electronic Library Service